

総評 2020.8月分 杉本真維子

「電灯の下／檸檬を剥き居り／微かに霧散する、命」

一個のレモンの孤独と、それを剥く一個の命の孤独が、電灯の下に照らし出されている。不可視のうちに噴き上がるレモンの飛沫が生々しく、生命のエネルギーを露出させている。

「LINEより／狼煙をあげたい／私がここにいることが／ありありと伝わるように」

ストレートにこう言うことも必要だと思えた。「LINE」と「狼煙」という一見かけ離れた言葉の接合に意表を突かれた。

「途中まで／わたしも一緒に乗って／送って／から／茄子の牛は大きめにした」

亡き父への親しみと、それゆえの深い哀しみが伝わるが、そこに「大きめの茄子」というユーモアが加えられ、奥行きが生みだされている。盆の送迎のための往復が、言葉の往復の道を切り拓き、そこに亡き父と子の交流がたしかにある。

「やりきれない／巻き貝の残響よ／通り過ぎてく／船ばかりです」

ジャン・コクトーの「耳」(「私の耳は貝の殻 海の響きを懐かしむ」)をどこか彷彿させる。さびしさが際立ち、印象に残った。

「あの日の今日／誰かのかわりに 今、水を飲む。」

言うまでもなく、「あの日」とは原爆の日のことだろう。こんなふうには、私たちの喉は、身体は、「あの日」を直接感じるができる。私たちはもっと自分の身体の色を信じてもいい。

「扇風機だけが音である／世界に／たったひとつの祈りはあった」

自分の胸のなかの「祈り」は自分でもなかなかわからないものだ。それがあるとき、ふとわかる。何気ない、日常のなかで、目覚めるようにわかる。その瞬間をうまく切り取っている。

そのほかの佳作は以下のとおりです。来月もお待ちしています。

「宿題に／慌てる子もない／八月の三十一日／旗振り当番」「向日葵や喪服の群れとすれちがう」

「へその緒を切ったら／痛いのはだれだ」「送り盆／茄子の牛で帰る父／茄子好きだから／食べるんじゃないかな」「最近シュークリームに似てきた父」「昭和三年広島生／原爆の話／もう思い出せない」と思い出さないように話す」「そっと大きな雪玉を／転がすように／まるく生きたい」「鬼灯が実は手花火してました」「枝を拾って名前を書く／刺すための形をしている」「病室と反対側の／ランドリー／違う顔した／夜景を見ている」「シャーペンの／シャーは昨日も聞きました。」